



子供が「きめる」学校

日本の学校には、多くのきまりが存在します。生活のきまりや長期休業中の約束事など、暗黙の規範が存在します。そこには子供たちの命を守るために大切なことを第一に考えているからです。しかし、それは、子供たちからしたら受け身の行為です。そこで、本校では子供たち自身が「きめる」場面を多く設定しています。

自分で決めること…当たり前のようにですが、このことが子供たちには自信を生むことに繋がるのです。心理学では、人が自らの行動を自分自身で決めたいという欲求のことを「自律的動機付け」と呼んでいます。自立=人に頼らず自分で独立した状態という意味であるのに対して、自律=自分で考え行動の主体となることを意味します。現在、本校では、子供たちに「きめる」活動を教育の場面で仕掛けています。「わくわく通信49号・118号」では、6年生と2年生の合意形成(みんなで決める)の話合い活動を紹介しました。また、「わくわく通信106号・126号・131号」では、5年生と3年生、4年生の意思決定(自分で決める)の学級活動の様子を紹介しています。これらの活動を積み重ねていくと、子供たちは何を学び、勉強の計画をどう立てるか、将来をどう考え何をを目指すのかを自分自身で悩み、決めるようになります。子供たちは、根源的には「自分できめたい。」という意思を持ち、それが発揮されるとき、最も「わくわく」した表情をみせるようになります。

ただ子供が決めることへ懐疑的な考えをもつ大人はたくさんいます。子供が「きめる」ことは全てを子供たちに任せるということではありません。学校で学ぶ以上、「何のために」「どのように」「どのようなプロセスで」学び、「どのような力を付けさせるか」という見通しを教師はもちます。また、教師が想定した正解にたどり着くようなあたかも「子供がきめる」形に誘導することもNGです。上記で紹介した話合い活動は、ときに教師の予想を超えた、子供たちの考えが出し合われます。このような活動を繰り返していくうちに、授業から生活の中へと子供たちが「きめる」場面が広がっていきます。本校で係活動や委員会活動が活発なもの「きめる」場面が多いことが要因の一つとして挙げられます。

今後も、教師が見通しをもちつつ、子供たちが教師の予想を超えていく飛躍のある学び生まれ、教師もそれを楽しみ、支援し評価していくような創造的な学びが今後も期待できる学校を目指していきます。

